

ラファエル・コランとフォントネー＝オ＝ローズのアトリエをめぐる一考察

三谷理華（福岡市美術館）

ラファエル・コラン（1850~1916）は、19世紀末頃から20世紀初頭にかけて活躍したフランスのアカデミズムの画家である。日本近代の洋画家たちの滞仏中の師として知られるこの美術家は、その死後日仏両国で長く忘れられた存在であり、日本においては、自国の近代の美術が形成されていく際の源泉の一つとの認識から、近年その検証が漸く開始されたと言えよう。

とは言え今日、コランについて知ることは必ずしも容易ではない。頼みとすべき作品や資料類の多くは散逸しており、その画業あるいは生涯についてさえもいまだ不明な点が多いのが実情である。パリ郊外の街フォントネー＝オ＝ローズにあったコランのアトリエも関連資料の乏しさゆえか未解明な事柄の一つであり、この点に関する調査、研究は現在まで殆どなされていない。

だが、フォントネー＝オ＝ローズはコランにとって特別な場所であったようだ。パリとは別に比較的早い時期から別荘を兼ねたアトリエを構えて制作を行い、広大な庭を設え、晩年には住居も移していたとされる。これらの情報を伝えるのは主に日本人の弟子たちの往時の回想録などであり、直接的な資料の乏しい中で画家とフォントネー＝オ＝ローズとの関わり、とりわけアトリエやそこでの制作のさまを知ろうとする際、貴重な手がかりとなる。

しかし、大半が記憶に基づく日本人画家たちの証言には曖昧かつ不明瞭な点も多々あり、これらのみでフォントネー＝オ＝ローズのコランのアトリエについて語ることもまた困難である。彼らの証言だけでは、例えばアトリエの位置していた正確な場所といった単純な事実さえも判然としないのだ。そしてこの状況を少しでも克服するためには、コランの公の足跡を示す資料であるフランス側の公文書から得られる情報を加味してみることが、有効ではないかと思われる。

よって本発表ではまず、現在フォントネー＝オ＝ローズ市役所はじめフランス側に残される公文書類と日本人画家たちの回想録などの日本側資料とを突き合わせ、フォントネー＝オ＝ローズのコランのアトリエやそれを取巻く状況にまつわる事実関係をできる限り明確なものとしていく。これは伝記的事実の発掘や確認に近いものではあるが、それすらも不明な点が多い研究段階にあるコランの場合、必要かつ不可避な過程であると考えられる。そしてその上で、アトリエを中心としたフォントネー＝オ＝ローズでのコランの制作のさまを主に日本人画家たちの証言に基づきながら可能な限り検証し、コラン特有の柔らかな光に満ちた画風形成の上でのそれが果たした役割について考察してみる。

すなわちこれら一連の考察は、手付かずであったコランのフォントネー＝オ＝ローズのアトリエの実態をできる限り解明し、それが画家の画業にとってもち得た意味や重要性の検証を試みることで、いまだ課題の多いコラン研究の今後の展開の一助たることを目指すものである。